手と手をつないで

No.375

山口 裕之（やまぐち ひろゆき）
（マザー・アース人権啓発研究所主宰）

コロナ禍を越えて新たなステージへ！「再び、つながる！」

新たなステージへ

新型コロナウイルス感染が福岡県で拡大してから2年半余り、ウクライナでの戦争が始まって半年が経過しました。この間に私たちは食料、エネルギー、肥料などの世界市場における価格上昇という現象により、ながらく経験したことのない暮らしの危機に直面しています。

これまでの日々で私たちは地域社会や国際関係における課題や脆さに気づかされるとともに、人のつながりや社会・世界のあり方に関して考えを深めることにもなりました。

これから時間はかかるでしょうがコロナ禍を収束させ、おさまった後は単に2年半前の状況に戻るだけではなく、さらに新たなステージへと進んでいきたいものです。

つながりを再度作り直す

ある日本を含めた国際世論調査（IPSOS2021・3・8公表）のデータをご紹介しましょう。

①「コロナ禍を受けて、私は以前より地域の人々を助けるようになっている」という設問に対して、そう思うと回答した人の割合、②「コロナ禍による混乱の中で、あなたの友人と家族からどの程度支援を受けたと感じるか？」に対して「支えてもらった」と回答した人の割合が、どちらも28カ国の中で日本は圧倒的な最下位にありました。

コロナ禍で、経済・雇用・教育をはじめ、あらゆる分野で将来が見通せなくなってきた中で、「支える・支えられる」という地域のつながりや友人・家族からの直接の支援の関係が希薄になり、「助けてほしい」という声をなかなか上げにくくなっている状況がみえてきました。

まさにこれからは精神的な支え合いをさまざまな場で作り直すことが不可欠になっています。

自分のできることから紡ぐ

私は、これまで地域でコロナ禍中における人権問題とこれからの地域社会のあり方についてさまざまな懇談をさせていただきました。その中で最も強く大切だと感じたことは「精神的な駆け込み寺をどれだけ増やせるか」ということでした。

太宰府市で例を述べると、市役所をはじめ、各地の公民館、自治会組織などにおいて多くの相談窓口が整備されてきました。しかし、これからはさらに人による駆け込み寺となる関係をたくさん創っていくことを大切にしなければならないということです。具体的には、「健康面の心配事なら医療関係の仕事をしてきた○○さんに」「経済面の相談なら税理士をしている○○さんに」「大きいものを動かすなら体力に自信のある○○さんに」「子育ての相談なら学校に勤めていた○○さんに」…というようなことです。

この関係を創っていくためには、各町内・サークル・職場などで「多忙さ」「ご迷惑かも」という思いにしばられずに、昔の井戸端会議のようにお互いの暮らしを語り、悩みを伝え、長所や特技を共有し合っていく営みが欠かせません。今こそ、自分のできるところから取り組み、点と点の人間関係を線につなぎ、線になった人間関係を温かな心をもった人々へと紡いでいきましょう。

このことは、きっと太宰府の空に見えない「人権・福祉・共生の屋根」を架けることにつながっていきます。